
記念日

長谷部まこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記念日

【Zマーク】

Z2243A

【作者名】

長谷部まいと

【あらすじ】

子供の無邪気な思いからうまれた、悲しく恐ろしい記念日です。朗読用に作った文章なので、読みにくี点などあるかと思いますが、ご了承ください。

信一

信二

今日は5度目の結婚記念日だ。

かなり大きめのバラの花束をかかえて家路を急いでいる。

僕は毎年、記念日という記念日（まあ、それは加代が勝手に決めたにすぎないのだが）を、

覚えていたためしがなかつた。何が記念なのかよくわからず、覚えていないというよりもむしろ、何も考えていないというのが正しかつた。

加代は記念日ごとに手ぶらで、時には泥酔して帰つてくる僕を見て、ひどく悲しそうな顔をするのだった。

声には出さないが、

「今年も忘れちゃつたんだね」

という目をするのだ。それを見ると、来年こそは……と思いつのだが、

結局のところ忘れてしまつた。

そんな僕が今、「奇跡」と呼ぶにふさわしい深紅のバラでいっぱいの花束を持ち、

いざ帰らんとする家には、加代のほかに一人の子供がいる。今年で10歳になる双子の女の子である。

お気づきのことだろうが、二人は僕たちの間に生まれた子供ではなく、

僕と双子とは戸籍上でのつながりしかない。つまり、加代の連れ子なのである。

加代の前夫であり、双子の父親である男は、双子が4歳の時に亡

くなつたらしい。

泥酔して階段を上りきつたところでバランスを崩し、転げ落ち、頭を打つて亡くなつたそうだ。なんともまぬけな話だと思つたとたん興味も失せ、その後延々と続いたおしゃべりおばさんの話はほとんど忘れてしまつた。

家が見えてきた。柄にもなくドキドキしていた。

加代はどんな顔で出迎えてくれるだろうか。

玄関の前に立ち、ネクタイをきちんと締めなおした。

そして、ふう、と深呼吸をしてドアを開けた。

「ただいま

声が少しうわづつた。

返事はない。

夕飯の買出しにでも出かけたのだろうか。

「ただいま」

もう一度、今度は探るような声で言つてみたが、やはり返事はない。

「ただいま」ともう一度言いかけたところで、視線と足が止まった。僕を出迎えた加代は、大きく目を見開いて、折れているのだろうか、首をエクソシストのように反転させ、操り人形の糸が切れたように階段の前に倒れていた。

「」とね

「」とね

なんだが外が騒がしい。

こないだは裏のおうちに消防車が来たし、お隣のお隣には救急車が
來たし、

ウーウー、カンカン、サイレンの音は聞き飽きていた。
サイレンはだんだん近づいてくる。音が大きくなつてくる。
ウーウーウーウー聞こえてくる。

一番大きく聞こえたところで、サイレンの音はピタリと止んだ。
そつとお部屋のドアを開けると、階段を挟んで向かい合つ、あや
ねちゃんのお部屋のドアも開いた。わたしは一ヶ口微笑んでお部
屋のドアを閉めた。

こつするとあやねちゃんは絶対私のお部屋にきてくれるのだ。
トトトンとリズミカルなノックの後、ゆつくりとドアを開け、
探るようにしてからあやねちゃんは私の部屋に入ってきた。

信ひちゃん、ちゃんと買つてきたかしら、ママにプレゼント。

今日は大丈夫だよね。

今朝、ボケーッとい飯を食べている信ひちゃんに近づき、
私は信ひちゃんの右の耳に、

「今日は何の日？」

と囁いた。信ひちゃんはあやねちゃんと私の顔を交互に見ては、
キヨトンとしていたから少し心配だった。

外の騒がしい声が大きくなつている。

あやねちゃんと私は、大きな窓から外を見た。

外にお隣のおばちゃんやら、見知らぬ金髪のお兄ちゃんやら、

ぐちゃぐちゃいた。

二人で外を眺めていると、お部屋のドアが少し乱暴に開いた。
ちゃんとノックしてつていつも言つてるでしょう?と振り返ると、
そこには知らないおじちゃんが立っていた。

あやね

あやね

くまみたいに大きい知らないおじちゃんは、私たちに近づいてきて、

本物の熊みたいに大きな手で私たちの頭をなでながら、「一緒におりで」と言った。

私とじとねりちゃんは、こつものよつて手をつないで、くまのおじちゃんにくつついてトントンと階段を下りた。くまのおじちゃんは、最後の階段で急に止まつたから、私とじとねりちゃんは、くまのおじちゃんの背中に頭をぶついた。くまのおじちゃんは、熊みたいにおつきいから、前は何にも見えなかつた。

わたしあはくまのおじちゃんの左後ろから前を一生懸命のぞいて、信ちゃんを探した。

信ちゃんは真っ赤なバラの花束を右手にもつたまま、朝ごはんを食べていたときよりも、もつとボケージとした顔で玄関に突つ立つていた。

プレゼントだ！

おんなじよつてくまのおじちゃんの右後ろから覗き込んでいたことねりちゃんと、くまのおじちゃんに見えなつて握手をした。

ちがひ言ひながら、アントンはさすがに驚いたんだね。

わたしたちは握手をしたまま、
くまのおじちゃんに聞こえないみうけお話をした。

わたしたちはくまのおじちゃんを後ろから突つついた。

「おどろいた。」アーヴィングはビビンでござる。

マネキンの髪がぐしゃぐしゃになつたママが倒れていた。

赤い花びら

信一

僕を呼ぶ声がする。まるでスピーカーのようだ。
両側から細い腕がするりと絡まってきた。

右手に握り締めていた花束がドサリと音を立てて床に落ちた。
真っ赤な花びらが一枚、脱げかけた加代のスリップパニハラリとくつ
ついた。

ハツとわれに返つて辺りを見回すと、スーツを着た知らない男が
目の前に立っている。

警視庁とか書かれた引越し屋のようなつなぎを着た男が数人、
テレビで見るようになちらこちらで探し物をしていた。
開け放された玄関の向こうでは、たくさんのやじうまがこぢらを覗
いていた。

スーツの男は「残念なことです」とい、
僕の悲鳴を聞いた隣のおばさんが通報したこと、
加代は階段から落ちて頭を打つて亡くなつたのだろうといふことを
説明した。

スーツの男はしゃがみこみ、目線を双子に合わせてなにやら言つて
いる。

双子はこくりとうなずくと、力を入れて両腕に巻きついてきた。
僕たち3人は白い布をかぶせられて運ばれていく加代と、
撤収していく警察の姿を眺め、辺りにいつもの静けさが戻るまで、
動くこともなく立ち尽くしていた。

ことね

わたしとあやねちゃんは信ちゃんを見上げた。

放心状態の信ちゃんを元気付けてやらねばならないと思つた私たち
は、

「今日はお花買ってきたんだね」とか、

「バラが大好きなこと知つてたの?」

などと話しかけた。

信ちゃんは怖いくらいじつめたい目で、私たちの手を振りほどいて、
何も言わずにお部屋に行ってしまった。

ママが倒れていた、昔はパパが倒れていた場所に取り残された私
たちは、

手をつけないで階段を上り、左右に分かれて自分たちの部屋へ戻った。

ひひじて？

あやね

朝早くチャイムが鳴った。

信ちゃんは毎朝田覚まし時計にも気づかないくらいだから、玄関に行かなくちゃと思った。

小さな声で「今行きます」と言いながらお部屋のドアを開けると、ことねちゃんのお部屋のドアも開いた。

いつものように手をつないで階段を下りようとしたら、驚いたことに信ちゃんが玄関に立っていた。

そしてお密さんは、くまのおじちゃんだった。

私たちは急いで信ちゃんのところへ行き、いつものように腕を組んだ。

私たちを交互に見た信ちゃんは、階段の下で倒れていたママと同じような顔をしていた。

信一

朝早くやつてきた刑事は、加代は何者かによつて殺されたのかもしないと言つ出した。

加代は階段から落ちて頭を打つて死んだのだ。

加代は事故死でいい。大きな声でそう言つたかった。

これ以上悲しい思いはしたくない。このまま放つておいてほしい。怒りにも似た悲しみが込み上げてきて、刑事につかみかかるうとした時、

両側から小さな手が絡みついてきた。

両側から僕を覗き込む2人の田がキラキラと輝いていた。加代が一度だけ、

「夫を亡くした私に元気をくれたのは、あの子達の笑顔だ」と話したことがあった。たしかにそのとおりかもしれない。二人の顔をみたとたん、ふつと力が抜けた。

僕は落ち着いて「帰ってください」と刑事に言い、双子を強く抱きしめた。

ことね

くまのおじちゃんと話しあると信ちゃんは、何も言わずにお部屋に行ってしまった。
信ちゃんは昨日から全然遊んでくれないし、お話をしてくれない。
ママがいなくなったら、私たちとだけ遊んでくれると思っていたのに。

あやね

信ちゃんもママとおんじだった。
パパがいなくなったら、ママは私たちとたくさん遊んでくれると思っていた。
でもママは、しょんぼりとして私たちとは遊んでなんかくれなかつた。

ことね

私たちはママが大好きだったから、ママを横取りするパパが嫌いだった。
だから私たちは、パパとママが寝る前に飲むお薬を、パパが飲んでいたお酒に混ぜた。
ママもすっかり眠ってしまったころ、パパは酔っ払ってタコみたいにふにゅふにゅしながら階段を上って

きた。

それ、それのお部屋からパパが階段をあがつてくるのを見ていた私は、

階段の上でパパを待つて、

「おやすみ」

と言つてわたしたちの頭をなでたパパを突き落とした。

パパはびっくりした顔のまま、声も出わずに階段を転げ落ちていつた。

私たちはパパの顔がおもしろくて、

クスリと笑つてそれぞれのお部屋に帰つていった。

あやね

パパがいなくなつてしまらくして、
悲しい顔をして全然遊んでくれなかつたママが、
信ちゃんを連れてきた。

信ちゃんは、パパやママとちがつてたくさん遊んでくれたし、
楽しいお話もたくさん聞かてくれた。

わたしたちは信ちゃんが大好きになつた。

わたしたちは、信ちゃんを横取りするママが嫌いになつた。
ママがいなければ、信ちゃんはわたしたちとだけ遊んでくれるだらうと思つた。

結婚記念日の日、ママは眠れなかつたらしく、
信ちゃんが会社に行つた後、少し眠そうな顔でテレビを見ていた。
私たちは、眠れない時にママが飲むお薬をジュースに溶かして飲ませてあげた。

そして、お部屋に戻つて寝ようと階段を上がつてきたママを突き落とした。

ママは、パパとおんなじよしおな顔をして、

パパみたいにくちやくちやになりながら落ちていった。
わたしたちはクスリと笑って学校へ行った。

ことね

信ひちゃんは会社から帰つても遊んでくれなかつた。

あやね

今日だつてまだせんぜん遊んでくれない。

あやね

わたしたちは信ひちゃんのお部屋に行つた。

あやね

どうして遊んでくれないの?

ことね

せっかくママがいなくなつたのに。

あやね

パパがいなくなつた時のママとおんなじ。

ことね・あやね

どうして遊んでくれないの?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2243a/>

記念日

2010年12月13日21時17分発行